飯田館跡

遺跡番号　201-307
調査次数　第1次
所在地　山形県山形市飯田
北緯・東経　38度12分46秒・140度19分39秒
調査委託者　山形県村山総合支庁建設部河川砂防課
起因事業　飯田土砂災害対策事業（防災安全・急傾斜地）
調査面積　1,068.4㎡
受託期間　令和7年4月1日～令和8年3月31日
現地調査　令和7年7月8日～11月14日
調査担当者　渡辺和行（現場責任者）・志鎌久悦
調査協力　山形市文化創造都市課文化財係
遺跡種別　城館跡
時代　中世
遺構　溝・柱穴・ピット・整地層
遺物　須恵器・陶器・磁器・瓦（黒瓦）・砥石・古銭　（文化財認定箱数：3箱）



遺跡位置図（S＝1:50,000）

調査の概要

今回の調査は、飯田土砂災害対策事業に伴うものである。今年度の調査対象となる範囲は館跡南側の斜面地と工事用道路建設に伴い掘削される東側の平坦地である。

斜面地の調査は安全面を考慮し、トレンチでの調査を行った。但し、窪地や平坦面については、広めに調査範囲を設定し、1から3区と分けて調査を行っている。

東側の平坦地は工事によって掘削される範囲の調査を行った。地形により2か所に分かれることから4区・5区と設定し、調査を行った。

遺跡の概要

飯田館跡は築城者は飯田播磨守（いいだはりまのかみ）とされている。飯田播磨守が最上義光（もがみよしあき）に仕えたと考えられる年代が1,584年頃と考えられる。そのため、早くて1,584年が築城時期と推定できる。飯田播磨守は1,600年の慶長出羽合戦において現山辺町の畑谷城を救援に向い、討ち死にをしている。播磨守の死は史料にも記載され、どの軍記物にも討ち死にの記述がなされている。このことから、飯田館跡に飯田播磨守が居住していたとすれば長くて1,584年から1,600年までの16年間となる。

その後の飯田館跡の処遇については史料に記載はない。こちらも推定になるが最上氏が改易される1,622年ごろには他の城と同様に廃城になったと考えられよう。その場合、築城から廃城まで長く見積もっても38年間の短い存続期間だといえる。

遺構と遺物

今回の調査で明確な遺構が検出されたのは5区のみであり、その他の地点では見つかっていない。5区で確認した遺構は、柱穴と土坑である。いずれも岩盤を削り、穴を掘ったことが確認できる。土坑からは遺物も出土している。内容は近世の磁器と砥石で砥石は複数点出土し

ている。斜面地や平坦地では造成土も確認されている。目的としては平らな面を作ることにあったとみられ、造成土の中から出土した遺物から現在の地形に近い状態になったのは 18 世紀頃と推定できる。

注目される遺物は近世前半に使用されていたと考えられる黒瓦が出土したことである。これらは造成土等から出土している。黒瓦は、山形市内で山形城の遺跡範囲でのみ出土しているもので、その他では飯田館跡以外確認できていない。近世前半の時点では限られた建物にのみ使用可能とされるものである。

まとめ

3 点ほど判明したことを記載しまとめとする。

1 点目、調査区域内の現在の地形は 18 世紀ごろに作られたとみられること。2 点目は瓦葺きの建物が近世前半において館跡内に存在していた可能性が出てきたこと。3 点目は南側斜面地には山城に見られるような防御施設がなかったことがあげられる。先にあげた 3 点はいずれも近世での出来事である。たが、造成土内から採取した炭化物の年代測定では中世を示すものもあり、人々の生活という点では中世の段階で何らかの活動を行っていた可能性がある。次年度の調査においてこれらの解決および補完するような成果を期待したい。



写真 1　調査区全景（東から）



写真 2　出土遺物（陶磁器）



写真 3　出土遺物（瓦）

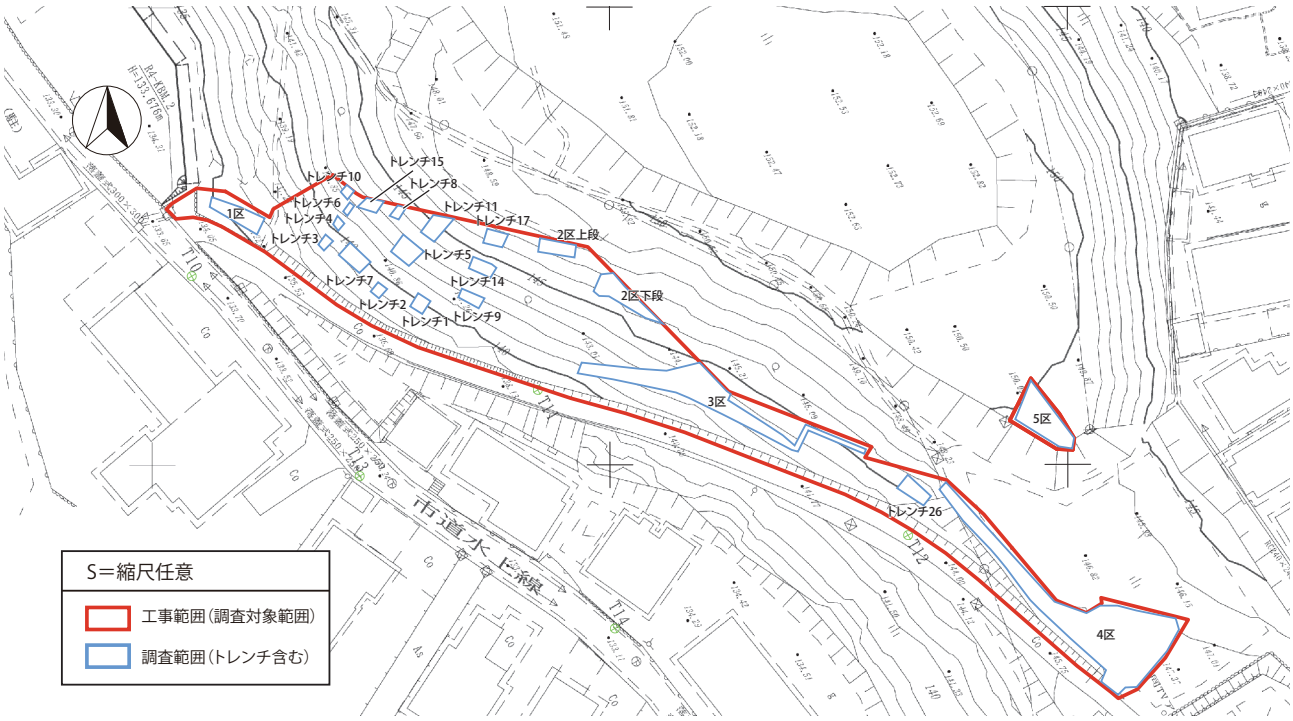


図 1　調査区全体図　縮尺任意